

ハジメテは間違ひから

## 目次

ハジメテは間違いから

5

番外編 八重倉課長の裏の顔は

219

ハジメテは間違いから

1　どうか、私のハジメテをもらって下さい

—何、これ……

—お前の親父がサインした借用書だ。見覚えあるだろ、その字。

—そんな……

—返済期限まで、もう日がねえって分かるよな？　このままじゃ、華族だっという水無家も形無しだよなあ。俺の親父がお前んちに貸した金、あの古びた屋敷を抵当に入れたところで、払いきれない額になってるんだぜ？

—お前が俺と結婚するのなら、この借金、なかった事にしてやるよ。親父だって、息子の嫁の実家に金を返せとは言わねえだろうしな。

—どうせ返す当てもないんだろ？　なら、帳消しにしてやるから俺と結婚しろよ。落ちぶれたとはいえ、名家の水無から嫁をもらえば、俺の家を成金扱いする奴らに一泡吹かせてやれる。

—男に見向きもされない地味女を嫁にもらってやるうって言ってるんだ。むしろ感謝してもらいたいぐらいだぜ、なあ琴葉？

—私が……あなたと結婚したら……

—もちろん、あの家そのままにしておいてやるよ。身体の弱ったじいさんや、心臓の悪い父親が今まで通り暮らしていけるようにな。

—私……

—もう少し愛想良くしてみろよ。まったく、色気のねえ女だよな。

—何するの!?　放して!

—どうせ結婚するんだからいいだろ？　味見させろよ、琴葉——

「いやっ……!」

そこで琴葉は、はっと目を開けた。視線の先には、小さな灯りがついた薄暗い天井が見える。厭らしく笑うあの男の顔は、どこにも無かった。

(さっきのは……夢?)

夢から覚めたのだと理解するまで、数秒かかった。

思い出さないようにしていた、三ヶ月前の事。顎を掴む手の、嫌な感触が生々しく蘇ってくる。おかげで息が上がり、心臓もどきどきしていた。

しばらくして、ようやく呼吸が落ち着いてくる。

(良かった……!?)

安堵あんどの溜息をつき、ふと左横を見た琴葉は——固まった。

「……………っ……………!？」

がぼっと起き上がると、上掛けがするりと身体から落ちた。肌くもに直接、初春の空気が触れる。剥むき出しになった白い胸の膨ふくららみを、慌あわてて手で隠した。

(え、裸!? ……ええっ!?)

口をばくばくと開閉させながら、琴葉は自分の左隣でこちらに顔を向けて眠る男性をまじまじと見つめた。

「あ……………あ……………」

乱れた前髪。長いまつ毛。少し緩んだ薄い唇。鼻筋の通った端整たんせいな顔立ち。

無造作に投げ出された、程よく筋肉の付いた右腕。そこから少し盛り上がった肩の滑なめらかなライン。

ベッドサイドに置かれた銀縁ぎんご眼鏡を見なくても、彼が誰なのかは明白だ。

(や、八重倉課長ーっ!?)

転がり出るようにベッドから下りた琴葉は、完全にパニック状態だった。

一体何がどうなっただろうなっただろうか、まるで分からない。

(え、だって、どうして!? どうして八重倉課長と!? だって私は氷川課長……………)

そう、憧れていた隣の課の氷川を誘ったつもりだったのに。なぜお堅い直属の上司の八重倉陸と、

裸でベッドに寝ているのか。

それって、つまり。

(かかか、課長と私……………!)

「……………」

かすかな声と同時に、八重倉の眉が少し動いた。裸のまま呆然ぼうぜんと床に座り込んでいた琴葉は、あわあわと周囲に視線を動かす。

見たところ、ここはどこかのホテルの一室らしい。あるものといえば、ダブルベッドと小さな備え付けの冷蔵庫に黒い机。同じく黒い椅子の上に、自分の服が無造作に掛けられていた。

(と、とにかく逃げないっ)

音を立てないように、急いで着替えた琴葉は、床に落ちていた自分のショルダーバッグを抱えて部屋を出る。

そうして一度も後ろを振り返らず、エレベーターホールに小走りで向かったのだった。

——翌日の朝。

(どうして、こんな事に……………)

頭上には抜けるような青い空が広がっているにもかかわらず、水無琴葉の心はどんよりと曇くもっていた。おまけにコンタクトをしたまま寝たせいか目が痛くなったので、今日は眼鏡を掛けている。

真つ直ぐな髪を後ろで一つに括くくった地味な髪形はいつも通りだが、せめてもとお気に入りの麻のジャケットとパールグリーンのフレアスカートを着てはみた。しかし、やはり気分は上がらない。右肩に掛けたバッグもいつもより重い感じがする。

思わぬ事態による衝撃と二日酔いのせいで、まだがん鳴っている頭に手を当てて、会社への道をとぼとぼと歩きながら、琴葉は昨日の失態について思い返していた。

そもその始まりは三ヶ月前、母親の十七回忌かひきのため久しぶりに実家へ戻った時の事だった。

そこで身体の弱い父、削はじの顔色が悪く、どこかやつれて見えた事が気になった琴葉は、病院へ行く事を勧めたのだが、法要の後にも用事が控えていて暇がないらしい。

ちよほど切らしてしまつた常用薬があればすぐ回復するというので、父の代わりに病院へ薬をもらいに行つた彼女は、そこで帰りのタクシーを待っている間に、会いたくもない人物にばつたりと遭遇したのだった。

『帰つて来たのか、琴葉』

そう言つてにやにや下品に嗤わらうのは、幼馴染おさなじみの湯下智倫ゆげとちゆん。明るい茶に染めた髪に加え、ワインレッドの派手なスーツを着込み、太い金鎖きんざのネックレスと高級腕時計を身に着けた彼は、どう見ても素行の悪そうな青年だった。

黒のワンピースを着た琴葉の身体を舐なめるように見回す視線に、鳥肌が立つ。琴葉は右肩に掛け

たバッグの紐を思わずぎゅつと握つた。

『法事に参列しに来ただけよ。すぐに向こうへ戻るわ』

琴葉がそう言うと、智倫の瞳が底意地の悪そうな光を灯ともした。そしていきなり右手を伸ばし、琴葉の二の腕をむんずと掴つかむ。

『ちよつと来いよ』

『何するのよ、放して!』

智倫は嫌がる彼女を引きずるように歩き、道路脇に停とめてあつた外国産の高級車に無理矢理押し込んだ。そのまま車を発進させ、人通りのない脇道まで走らせると、そこで、急停車させる。そうしてバッグを胸に抱き、ドアにぴたりと身を寄せて警戒する琴葉の眼前に、一枚の紙を突き付けたのだった。

『何、これ……』

——それは莫大ばつだいな金額の書かれた借用書だった。文章を読み進めるにつれ、琴葉の顔から血の気が引いていく。

『お前の親父がサインした借用書だ。見覚えあるだろ、その字。お前の親父、心臓の手術をした事があつたよなあ。その時に水無家の不動産事業も傾かたむいて……そこを同業である俺の親父が助けたつて訳だ』

『そんな……』

琴葉が高校を卒業する直前。祖父が脳梗塞で倒れ、次いで父も心臓の発作を起こして入院した。二人とも手術を受けてなんとか一命をとりとめたが、元来身体が丈夫でなかった父は、手術後も半年ほどの入院を余儀なくされた。借用書の日付は確かにその頃のもので、記されたサインも癖のある父の字に間違いなかった。

——私は大丈夫だから、琴葉は何も心配せず、高校を卒業して短大へ進学する事だけを考えなさい。

入学が決まっていた短大を諦めて働くと言った琴葉に、そう笑って返した父の顔が目には浮かぶ。確かに智倫の家に融通を利かせてもらったという話は聞いていたが、あくまで会社関係で金銭の絡まない支援を受けただけだと思っていた。だが借用書には、水無家の会社名の記載はなく、父個人の名前が記されている。

（私の進学やおじい様の治療費も——やっぱり無理していたの？ お父さん……）

そこに書かれた金額は、とてもじゃないが琴葉一人でどうにか出来る額ではない。自慢げに借用書をちらつかせた智倫は、それをスーツの内ポケットにしまい込むとこう言った。

『返済期限まで、もう日がねえって分かるよな？ このままじゃ、華族だっという水無家も形無しだよなあ。俺の親父がお前んちに貸した金、あの古びた屋敷を抵当に入れたところで、払いきれない額になってるんだぜ？』

『……っ』

実家の水無の屋敷は、華族だった祖先が建てたもので、広い日本庭園に加えて蔵まである、由緒正しい日本家屋だ。

ただし、のどかな田園風景が広がる山裾に位置するため、広いと言っても土地自体の値段はさほど高くなく、売ったところでそこまでの金額にはならないだろう。それに何より、先祖代々引き継がれてきたあの屋敷を祖父が手放すとも思えない。

（おばあ様が大切にしていた桜が咲くのを、毎年楽しみにしているのに）

祖母を亡くし元気をなくした祖父の生きがいは、もはや思い出の詰まったあの屋敷だけなのだから。

もし、それを奪われたら——

（おじい様は生きる気力をなくしてしまう……それにお父さんだつて）

入り婿である父が水無家の事業を立て直そうと必死に頑張っている事は、琴葉だつて十分すぎる程理解している。その事業が借金のせいでダメになったら、父は自分自身を責めるに違いない。そうしたら、また身体の具合も悪くなってしまいかも……

黙り込んでしまった琴葉に、智倫は楽しそうに言葉を続けた。

『なあ、お前次第でこの借金チャラにしてやる……って言ったらどうする？』

『えっ』

琴葉が息を呑むと、智倫は口端を上げてにまりと笑った。その目には、獲物を罫り殺す獣のよう

なぎらぎらとした色が浮かんでいる。

『お前が俺と結婚するなら、この借金、なかった事にしてやるよ。親父だって、息子の嫁の実家に金を返せとは言わねえだろうしな』

『な……』

——智倫と、結婚？

全身におぞ気が走った。大きく目を見張り、顔を強張らせた琴葉に、智倫はだみ声で畳みかけてくる。

『そろそろ俺も、所帯を持って落ち着くようにと親父から言われてんだよ。なら、お前がちょうどいいって訳だ。元華族の水無家といえ、上流階級にも知られた名家だからな』

智倫は、彼の父親が一代で築き上げた不動産会社の跡取り息子だが、金と権力に物を言わせて我儘放題のどうしようもない男だ。

二歳年上の彼とは小学校からの知り合いだが、『地味女』だの『野暮ったい』だの『陰気臭い』だの、散々虐められてきた記憶しかない。周囲の子ども達も、智倫の顔色を窺って琴葉を遠巻きに見ている状態だった。

琴葉はなるべく彼に近付かないようにしていたが、何故か向こうからやって来ては、こちらを傷付ける言葉を投げていく。そして智倫の瞳に浮かぶ薄気味悪い執着心も、年々大きくなっていくようになった。

琴葉が地元を離れて就職したのには、そういう理由もあった。物理的に距離を置けば、そうそう会う事もなく、智倫も興味を失うだろうと思っただのだ。なるべく里帰りしないようにしていたのもこのせいだ。

『水無家の名前が欲しいって言うの？ そのために、気に入らない女とでも結婚するって？』

『気に入らないなんて言ってねえだろ？ 琴葉』

ねっとりとした声音に、ぞくりと背筋が寒くなった。たくさんの女を知っている智倫の目は今、琴葉を獲物として捉えている。

『どうせ返す当てもないんだろ？ なら、帳消しにしてやるから俺と結婚しろよ。落ちぶれたとはいえ、名家の水無から嫁をもらえば、俺の家を成金扱いする奴らに一泡吹かせてやれる』

智倫や彼の父親の評判は、地元ではあまり芳しくない。智倫自身の素行の悪さに加え、片田舎のこの地方では、未だに家柄を重んじる風習があるからだ。今にして思えば、彼が琴葉を虐めていたのも、名家の出自が気に入らないからだだったのかもしれない。それを、今回の件を利用して、手に入れようとしているのだろうか。

『男に見向きもされない地味女を嫁にもらってやろうって言うてるんだ。むしろ感謝してもらいたいぐらいだが、なあ琴葉？』

琴葉はぐっと唇を噛んだ後、口を開いた。

『私が……あなたと結婚したら……』



『もちろん、あの家もそのままにしておいてやるよ。身体の弱ったじいさんや、心臓の悪い父親が今まで通り暮らしていけるようにな』

(お父さん……おじい様……)

借金の事を何も言わなかった父。

きつと琴葉に心配を掛けまいとしたのだろう。父はいつだって、琴葉のために無理をしてしまう。また心臓が悪くなったら……それに祖父も、祖母との思い出をあんなに大切にしているにもかかわらず、父と琴葉のためを思つて屋敷を売ろうと考えるかもしれない。

(私さえ我慢すれば)

お父さんもおじい様も、このままあの家で平穩に暮らしていける——？

だが、智倫と結婚すると考えただけで吐きそうになった。体温が下がり、握りしめた手のひらに冷や汗がじわりと滲む。

どうする？ と見下すように嗤う智倫を前に、琴葉はごくんと生唾を呑んだ。

『私……』

——本当に、父と祖父の生活を保障してくれるのか。

そう聞くと、智倫は『それはお前次第だな』とまた嗤った。にやにやする彼の視線を浴びながら、しばらく考えた後、琴葉は心を決めた。

彼女が黙つたまま首を縦に振るのを見た智倫は、じらりとアクセサリを鳴らして琴葉に右手

を伸ばしてくる。

『もう少し愛想良くしてみろよ。まったく、色気のねえ女だよな』

『何するの!? 放して!』

顎を掴まれた琴葉が叫ぶと、智倫は顔を寄せてきた。

『どうせ結婚するんだからいいだろ？ 味見させるよ、琴葉——』

必死に抵抗して、車から転がり出た琴葉を、智倫はそれ以上追つては来なかった。車上から琴葉を見る彼の顔には嗜虐的な悦びが浮かんでいる。

『半年以内には覚悟決めとけよ。じゃあな』

彼の車が走り去った後も、琴葉は震えながらその場で立ちつくすしかなかった——

それから色々と考えてはみたものの、やはり智倫と結婚しなければならぬという結論しか出なかつた。

借金は琴葉の退職金をつぎ込んだところで何とかなる額ではない。そんな大金を出してくれそうな親戚もない。むしろどちらかといえは、本家である水無の家に頼ってくる者ばかりだ。

破産申請をして会社を手放したとしても、琴葉の収入では身体の弱い父と祖父を抱えて生活出来る見込みはない。何より、これ以上二人の体調を悪化させるような事はしたくなかつた。

ただ……

(あの男にこのままハジメテを捧げるのだけは、絶対に……！)  
嫌だ。

智倫の厭らしい視線を思い出した琴葉は、自分を抱き締めるようにして二の腕をさすった。地元には、智倫が琴葉を虐めるせいで男性が寄り付かず、恋人など出来ようもなかった。家を離れて就職してからも、仕事と新生活に慣れるのに必死で、これまた余裕がなかった。

だが、智倫と結婚せざるを得ないとしても、せめてハジメテくらいは自分の選んだ人と、思うのは贅沢だろうか。

(少しだけでも、好きだって思える人と、一度限りでいいから結ばれたい……)

そうすれば、その後の結婚生活も何とか乗り切れるかもしれない。自分のハジメテは、自分が選んだ人に捧げた、という思い出さえあれば。

ただど誰を選んだとしても、半年後に必ず別れる事になる。そんな身勝手が許されるのだろうか。(それに結ばれたいっていても、そもそもどうしたらいいのか……)

男性経験が皆無な琴葉には、いい考えがまるで思い浮かばなかった。故郷にはもちろん、会社にもそこまでプライベートな事を相談出来る親しい相手はいない。八方塞がりの状況に頭を抱えてしまふ。

そんなふうには三ヶ月ほど悶々と悩んでいた琴葉の視界に入ってきたのが——隣の課の氷川凛久課長の姿だった。彼を目にした途端、琴葉の心にはと光が差す。

(そうだ、氷川課長なら)

目鼻立ちが整った甘いマスク。いつもほのかに香る爽やかなコロン。

琴葉の直属の上司である八重倉も長身だが、氷川も同じくらい身長が高い。さらには、普段着ているスーツも仕立ての良いブランド物が多く、日本有数の財閥である氷川財閥の御曹司ではないかとも噂されていた。

そんな彼に近づく女性は当然後を絶たず、氷川の女性関係はなかなか派手だ。が、彼の仕事が忙しいため、数ヶ月ぐらいで別れる事が多いと聞いていた。

『それでも悪評は聞かないのよ。元カノ達も、彼ならしょうがないって感じだし。人徳かしら』とは、社内の情報通、音山敬子の言葉だ。

来る者拒まず、去る者追わずが、氷川の信条らしい。

さらに、彼は別れた女性の事についてほとんど口にしならしく、この辺りの事は全て女性側からの情報との事。つまり、抱いてももらっても、琴葉が黙ってさえいれば大事にならない可能性が高い。

——それなら。

それなら……私みたいな地味女が迫っても、抱いてくれて。

私がいなくなっても、彼を傷付ける事もなく。

迷惑をかけずに、後腐れなく立ち去れる——？

おまけにタイミングのいい事に、大口の案件を取れたとかで、氷川の営業二課とここ営業一課の合同飲み会が来週開催される事になっている。

そこで何とか二人きりになって、氷川課長に頼み込んでみよう。あの時、親切にしてくれた優しい彼なら、一夜限りの関係を持つてくれるかも——

「……っ!?」

ぼうっと考え込んでいた琴葉は、こちらを見ている八重倉とふと目が合った。銀縁眼鏡の奥の瞳がじっと琴葉を見つめている。咄嗟に小さく会釈して視線を逸らしたが、心臓がどきどきと速く脈打っていた。

(や、八重倉課長の視線つて心臓に悪い……)

こちらの想いを見透かすかのような視線に気まずさを覚え、椅子の上でもぞもぞと腰を動かし、座る位置を変える。その時、八重倉の視線を追うように氷川がくると振り向き、琴葉に声をかけた。

「あ、水無さん。この前うちの課の近藤が世話になったつて聞いたよ、ありがとう」

にこやかなその態度に、琴葉は一瞬頭が真っ白になったが、「いえ、二課の皆さんにはいつもお世話になっていますから」と何とか返事をする事が出来た。

「ここ数年のデータを集計してくれたんだつて？ 水無さんの資料、分かりやすいつて顧客にも評判だね。近藤も案件をゲット出来たと喜んでたよ。そのうち本人が礼に来ると思うけれど」

二課の営業補佐が急病で休んだ時、琴葉がピンチヒッターとして近藤の資料作成を手伝った件を言っているのだろう。データの収集や分析は、琴葉の得意分野だった。

「ありがとうございます。そう言つて頂けると嬉しいです」

やや口元を強張らせつつも、琴葉は笑みを浮かべて言った。

それも営業補佐の仕事のうちだから、当たり前前事をしたただけだが、こうしてさり気なく褒められると、やはり嬉しい。

「鬼課長の特訓にもめげずについていった成果だろうね。なあ、八重倉？」

そう話を振られた八重倉の表情は変わらない。無表情のままこちらを見つめる彼の視線に、琴葉は椅子の後ろにでも隠れたくなった。

「無駄口叩いてないで、さっさと戻れ」

八重倉が抑揚のない声で言うと、氷川は「分かった分かった。お邪魔したね」と軽く手を振り、八重倉の机から離れて行った。

琴葉も氷川に会釈をすると先程思い付いた事を頭の片隅に追いやり、かたかたとキーボードを叩く作業に集中し始める。

——そうして飲み会の夜。氷川と八重倉はいつものように女子社員に取り囲まれていた。琴葉は

ビール瓶を持ち、あちこちにお酌をして回りながら、氷川の様子を窺う。そして、二人の真正面が空いたと同時にそこに滑り込み、彼のグラスにビールを注いだのだった。

「次は柚子チューハイをお願いします」

「へえ、水無さんって結構イケる口なんだね？」

そう微笑む氷川に、琴葉はぎこちなく笑い返す。自分の前に並ぶ空になったグラスの量は、いつも少ししか飲まない琴葉にしてはあり得ない数だった。だけど、こうでもしないと間が持たなくて逃げ出しそうになってしまう。すぐ来たグラスを受け取った琴葉は、チューハイに口を付けながら、氷川を観察した。

薄いブルーのワイシャツに、紺のストライプのネクタイを締めた氷川は、『社内の王子様』と言われるだけあり、居酒屋の座敷に座っている姿ですら人目を惹いている。

氷川の前に座る琴葉に女子社員からの視線が突き刺さってきたが、今日だけは負けられないと席を譲らず飲み続けていた。

今の琴葉は、いつも一つに括っている髪を肩まで下ろし、ふわりと内巻きにカールさせている。メイクもいつもより明るめのリップグロスをつけ、服装も、淡いピンクのフリースカートに七分袖の白のブラウスという、これまたいつもよりも明るい色を選んでいった。それもこれも、氷川の目を惹くためだ。

「飲み過ぎじゃないのか、水無」

氷川の左隣に座る八重倉が、眉を擡めて言う。銀縁眼鏡の奥の瞳も、琴葉を咎めているように見えた。

氷川と同じ色合いのブルーのワイシャツを着ているにもかかわらず、八重倉は不思議とくだけた感じにならない。いつも通り、真面目でお堅いイメージのままだった。

「まだ大丈夫です、八重倉課長。それに、たまにはいいかなって思ってます」

実際、緊張しすぎて酒の味も分からない琴葉は、少しだけ笑って見せた。八重倉の口元が不機嫌そうにぐっと締まる。それを見た琴葉の胸が何故かつきんと痛んだ。

「まあまあ、八重倉。今日は一課二課の合同飲み会なんだし、あまり堅い事言わなくてもいいじゃないか。水無さんだって飲みたい時もあるだろう？」

氷川が肩をぽんと叩いてそう言っても、八重倉の渋い表情は変わらなかつた。

同期だというこの二人は、普段からとても仲がいい。常にこやかで、周囲にぱつと華やかな印象を与える氷川に、いつも冷静で仏頂面ながら、美形の八重倉。

二人揃うと目の保養になるわねー、と課の女子社員も噂していた。

「あまり羽目を外すな。分かったな」

再び八重倉に見つめられ、琴葉は蛇に睨まれたカエルの気分で頷いた。

「……はこ」

お前はこんな席でも厳しいよなあ、という水川の声を聞きながら、琴葉は水を一口飲んだ。アルコールで火照った身体に、冷たい水はとても美味しい。水川をむすつと見返す八重倉を盗み見て、琴葉は溜息を漏らした。

——厳しいけれど、本当は優しい人、なのよね……

琴葉が所属する営業一課の敏腕課長。

銀縁眼鏡にさらりとした黒髪の八重倉は、隣の第二課の水川課長と並び、数年前に弱冠二十九歳で課長に就任したやり手営業マンだ。いつも無表情な彼だが、的確な助言やきめ細かいサポートで顧客からは圧倒的な信頼を得ている。

仕事には厳しいが、一人一人の適性を見て業務を振り、分らない所はきちんとサポートしてくれる課長として、部下からも慕われていた。

(私がミスした時も、丁寧に指導してもらったわよね)

入社から半年が経った頃、経理部に誤った伝票処理を依頼してしまった琴葉は、びくびくしながら八重倉の指導を受けていた。だが彼は、一切声を荒らげる事なく、琴葉が間違えた箇所を重点的に教え、『今後気を付ける。同じミスはするな』と一言注意しただけだった。

危うく顧客に金額の異なる請求書を送付してしまおう直前だったため、てつきり酷く怒られると思っていた琴葉は、彼の机の前で立ちすくんでしまった。そんな琴葉をじろりと見た八重倉は、『さっさと席に戻れ』と言ひ、すぐに書類に視線を移す。

慌てて席に戻った琴葉は、隣に座る先輩から『あれが課長のスタイルだから』との説明を受けた。どうやら琴葉が萎縮しているのを見て取って、それ以上追い打ちをかけずにいてくれたらしい。『課長が皆の前で誰かを叱責するなんて滅多にない。水無さんが反省してる事も、十分分かっているはずだから』と聞かされ、ようやくほっと息をつく事が出来たのだった。

それから琴葉は、八重倉を観察するようになった。

いつも厳しい顔をしている彼だが、部下が売り上げを報告する時は、よくやったと言って小さく笑う。伸び悩む部下には、的確なアドバイスを欠かさない。琴葉の件もそうだが、『部下のミスは全て自分のミスだ』と上に報告していると聞く。

そんな八重倉を琴葉が尊敬するようになるまでに時間はかからなかった。端正な横顔や広い背中を、目で追う毎日。

——少しでも課長の役に立てるようになりたい。課長みたいに信頼してもらえ人になりたい。そう思って仕事に打ち込み——入社して三年経った今では、少しは自分で仕事も回せるようになった。

彼にも信頼してもらえようになったと思っっているけれど……

(今からしようとしている事……知られたら、きつと軽蔑される……)

水川と違い、八重倉には浮いた話一つもない。もちろんモチない訳ではなく、彼のファンは社内にもたくさんいるのだが、彼自身が女性に対してガードが固すぎるのが原因だ。

現に、琴葉が配属される前にいたという営業補佐の女性は、八重倉に付き纏ったせいで、いつの間にもやら配置転換されていたらしい。

告白した彼女を『そんな気はない』とぼつさり切り捨てたという噂が広まったためか、今社内では八重倉に迫ろうとする女子社員はいない。

そんなお堅い彼に、氷川を誘惑しようとしている事を知られたら……

琴葉はぶると頭を振って、冷たいグラスに手を伸ばした。爽やかな柚子の香りを味わう間もなく、ごくごくと飲み干す。それから、こちらを見ている八重倉の視線を避けて氷川の方に顔を向けた。

「氷川課長も、アルコールお強そうですね」

「そうだなあ、まあそこそこは」

こいつ程じゃないけど、と八重倉を親指で指した氷川は、次々とお酌に現れる女子社員を断る事なく、全員に対しにこやかに対応していた。

八重倉もそこそこ相手をしているが、氷川と違ってその顔には笑み一つない。本当に対照的な二人だ。

（様子を見て……二人きりになるようにして……）

琴葉はぐつと空のグラスを握り締めた。この機会を逃したら、もうチャンスはないかもしれない。

（そう、頑張らないと……！）

手を上げて再びチューハイを注文し、何とか緊張を紛らわそうとしたが、いくら飲んでも、今日は酔えない。だが、愛想笑いを浮かべる頬をやや引き攣らせつつも、琴葉は飲むペースを落とさなかった。

「お前……」

八重倉がますます不機嫌そうな表情になったが、氷川に集中していた琴葉は彼の態度を訝しく思う余裕すらなかった。

——どくん、どくん。

心臓の音が痛いくらいに大きく聞こえる。琴葉はどくんと生唾を呑み込んだ。

（今しか……今しかチャンスはない……つ）

一歩踏み出すと、足元がふわつと浮く感覚がした。ぐらりと揺れた身体を長い廊下の壁に押し付け、息を整える。

さつきまでちつとも酔えなかったのに、今はアルコールが回り、頬は熱いし息も荒くなっていた。今日の服装はなるべく薄着にしたはずだが、暑くて仕方がない。

（ごめんなさい、ごめんなさい、氷川課長……！）

談笑する声や食器がぶつかる音も、どこか遠くに聞こえる。琴葉は廊下の奥までよたよたと歩き、突き当たりにある男子トイレと女子トイレの入り口の間の壁にもたれた。

氷川が席を外すのを見て、こっそり自分も席を立ったのだ。八重倉もその少し前に離席していたので、ちょうど良いタイミングだった。

間を空けて後をつけ、氷川が男子トイレに入るところまでは確認した。もうすぐ出てくるはず――

(お酒の力を借りてだなんて、悪い事だと分かっているけど、でも)

こうでもしないと、勇気が出なかった。個人的に話をした事もない氷川に――処女をもらって下さい、と頼むなんて。

(でも、私……!)

自分を見る、智倫の執拗な視線と厭らしく歪む口元。脳裏に浮かんだそれを振り払うように、琴葉はぶるぶると首を振る。

(絶対、絶対、あの男にだけは、ハジメテを捧げたくない……!)

と、右側から、かたんとドアの開く音がした。はっと目を上げると、琴葉の横を広い背中が通り過ぎていく。

ブルーのワイシャツにグレーのズボン。見上げるほど背の高い身体からふわりと香るコロン。

氷川だ。

「あのっ……!」

よろめきながら声を上げた琴葉の身体は、振り向いた彼に正面からぶつかった。

顔を見る勇気が出ず、琴葉は広い胸板に顔を埋め、ぎゅつと彼に抱き付く。温かい。その温かさ  
に勇気をもたらした琴葉は、そのまま思い切った言った。

「お願いです! わ、わ……私を抱いて下さいっ!」

背中に回した手に力を籠めると、ぴくつと彼の身体が震えた。

「お願い、ひか……!」

(あ……れ?)

急に動いたせいか、酔いが一気に回ったらしい。ぐらりと視界が揺れる。

大きな手が、自分の背中を支えたと感じたのを最後に、琴葉の意識はふつりと途絶えてしまったのだった。

\*\*\*

男子トイレの前で氷川を待ち伏せし、彼が出てきたところで抱き付いて、それで――?

(覚えてない……)

そこから今朝、ホテルのベッドで目を覚ますまでの間の記憶は、何も残っていない。自身のあまりの醜態に、会社へ向かう足を止めた琴葉は頭を抱えた。

考えられる事態は、ただ一つ。恥ずかしくて相手の顔をきちんと確認しなかった琴葉が、氷川と

八重倉を間違えて抱き付いたという事だ。

あの時は、ブルーのワイシャツとコロンの香りで氷川だと決めつけてしまったけれど、どうやら違ったらしい。

「……どうしよう……」

女性慣れしていると有名な氷川課長なら、琴葉がいきなり告白しても軽く受け取ってくれると思っていたのに。

それを真面目で浮いた話一つない八重倉課長にしてしまったなんて。

酔っぱらった部下に抱き付かれ、『抱いてくれ』と言われて、彼はどう思ったのだろう。絶対、だらしのない女だと思われたに違いない。その上で身体を重ねてくれたんだとしたら——？

(課長には……軽蔑されたくなかったのに……)

もう、すぐにでも辞表を出して、一目散に逃げだしたい。だけど、今日中に八重倉の承認を得なければならぬ書類があった事に気が付いてしまった。出社しないと、彼だけでなく、色んな人に迷惑を掛けてしまう。そんな訳で、琴葉は会社に近付くにつれ一層重くなる足を引きずりながら歩いているのだった。

「おはよう、水無さん」

ぼん、と後ろから肩を叩かれた琴葉は、びくつと背を震わせて振り向いた。

そこには、柔らかな笑みを浮かべた氷川が立っている。グレーのストライプのスーツを着こなし

た彼は、雑誌に出てくる俳優のようにスマートだった。

「お、おはようございます、氷川課長」

おずおずと挨拶を返すと、氷川はふふふと含み笑いをし、琴葉の隣を歩き始めた。

「体調は大丈夫？ 昨日の最後は、かなり酔ってたみたいだから」

「う、あ、は、はい……大丈夫です……」

頭は痛むが、その他は何ともない。あんな事をした割には、身体の具合は悪くないようだ。

言葉に詰まりながら答えると、氷川はそのまま話を続けた。

「まあ八重倉が付いてたから、あまり心配はしてなかったけど」

「えっ!？」

ひくりと口元を強張らせた琴葉に、氷川が悪戯っ子のような顔で言う。

「トイレから出たら、あいつが足元ふらついている水無さんを支えてて。そのまま送って行くって言  
うから、俺が部屋から上着や鞆を持って行ったんだ」

(あの場に、氷川課長もいたんだ)

全然気付かなかった。

「ご……ご迷惑を、お掛けしました……」

次第に小さくなっていく琴葉の声に、氷川は「気にしないで」と右手をひらひらと振った。

「心配しなくても皆出来上がったから、二人が抜けた事も気付かれていないよ。八重倉も目立た



ないように行動していたし」

「そ、そう、ですか」

「それにしても……」

そこで何かを思い出したのか、氷川がくつくつと笑い声を漏らした。

「水無さんを腕に抱いてたあいつの顔が見物だね。俺が『酒の匂い消しに俺のコロンを振りかけたおかげじゃないのか』って、冗談言ったら睨まれた」

「……」

それが原因であなたと彼を間違えました、なんて言えるはずがない。困った琴葉が氷川を見上げると、彼はふむと考え込む様子を見せた。

「水無さんなら安心かな。真面目だし、浮ついた所もないから」

「は、あ？」

ぼかんと口を開ける琴葉に、氷川は優しく微笑む。

「あいつ、女性にいい思い出がなくてね。自分から擦り寄ってくるようなタイプは苦手なんだよ。でも水無さんの事は、前から慎重で深いつて褒めていたし」

胸の奥が鈍く痛んだ。昨日の琴葉は、まさに『擦り寄った』のだ。

「じゃあ、あいつの事頼んだよ」と氷川は、手を振って先に行く。遠ざかる背の高い後ろ姿を見て、琴葉は重い溜息をついた。

株式会社櫻野産業の朝は早い。特に営業部の人間は、早朝にミーティングをする事もあり、他の部署よりも早出す社員が多かった。それを見越して、琴葉もさらに早めに出社したはず——  
だったのだが。

(うつ……もういる……)

びくびくしながら一課に入ると、部屋の一歩奥、窓際の席に、八重倉がすでに座っていた。

窓を背に、パソコンのモニタ画面と手元の書類を交互に見ている。いつもと変わらず、隙の無い姿。

今日は白のワイシャツに濃緑のネクタイをしている。濃いグレーのスーツが良く似合っていた。ふと今朝の乱れた前髪を思い出した琴葉は、忘れようと頭を横に振った。

「おはよう……ございます……」

小声で挨拶をした琴葉の声に、八重倉は視線を琴葉に向けた。眼鏡の奥の瞳に射抜かれた琴葉は、思わず目を伏せてしまう。

「おはよう」

(……え?)

琴葉が顔を上げた時には、八重倉はこちらに視線を向けていなかった。何食わぬ顔で、パソコンと書類を見比べている。

ジャケットを入り口近くのロッカーに掛けた琴葉は、そそくさと自席につき、シオルダーバッグを机の引き出しに入れると、パソコンの電源を入れた。モニタに隠れて彼の方をちらりと見たが、八重倉はもう仕事に没頭しているようだ。

どきどきと心臓がうるさい。でも、彼はいつもと同じ冷静な態度だ。

（もしかして……課長も覚えてない、とか……？ 私は課長が起きる前に帰ってしまったし、彼だって代わる代わるお酌をされて、結構飲んでいた……はず。もしかして、このまま何事もなかった感じ、で終わる……？）

ほんの少しだけ、琴葉の心に希望が見えた。

「おはよう、水無さん」

そんな琴葉の思考は、明るい声に遮られた。琴葉は左隣に座った音山に会釈する。

「お、おはようございます、音山さん」

かちつとした黒のパンツスーツを着た音山は、一課でも成績優秀なベテランの営業だ。頼りがいのある姉御肌な性格と、女性ならではのきめ細かい心遣いが顧客にも好評で、社内でもあちらこちらにファンがいると聞いている。

琴葉の顔を見た途端、あら、と音山が瞳を光らせた。並み外れた嗅覚を持つ彼女は、社内のある何か勘付かれたのだろうか。キーボードに置いた琴葉の指先に力が入る。

「今日が眼鏡なのね。その丸眼鏡、懐かしいわー。ここに配属された頃に戻ったみたいね」

ほっと溜息をつきつつ、琴葉は音山に答えた。

「え、ええ。コンタクトだと目の調子が悪くて」

「そう言えば、ちよつと疲れてる感じね。今日は早く帰ったら？」

（ええ、精神的にぎりぎり疲れています……）

「はい、そうします。そうそう、音山さんの伝票でお聞きしたい事が」

あまり昨日の事に突っ込まれなくなかった琴葉は、さり気なく話題を変えた。伝票と聞いた音山は、すぐに意識を仕事モードに切り替えたいらしい。

「あら、なあに？」

「あの、これなんです……」

次々と出社してくる社員に挨拶をしつつ、琴葉は音山に説明を続ける。

そんな彼女に鋭い視線が飛んでいた事に、琴葉は全く気付いていなかった。

\*\*\*

「ふう……これで全部終わり」

業務終了時刻を知らせるチャイムは先程鳴ったばかり。切りのいいところまで書類作業を終わら

せた琴葉は、片手でとんとんと肩を叩いた。眼鏡を外し、眉間を指で揉む。パソコン画面に集中していたせいか、だいぶ目が疲れていた。

(なんて事、なかった……)

午前中、びくびくしながら八重倉に書類を持って行った琴葉だったが、彼の態度はいつもと同じだったと思う。琴葉から受け取った書類を確認した後、「これで経理に回してくれ」と、これまた普通に指示を出してきた。

「は、い」

机の前に立つ琴葉から視線を外し、八重倉は再び自分の仕事に集中し始めた。ぺこりとお辞儀をした琴葉も、そのまま席に戻る。

それから、彼に話し掛ける機会は数回あったが、やはりいつもの態度を崩さなかった。

(やっぱり、覚えてなかったんだ……)

ほっとすると同時に、どこか寂しい気もするのは何故だろう。琴葉は眼鏡を掛け直し、パソコンの電源を切って机の上を片付け始めた。

「えっ……と、後は」

部屋をぐるりと見回すと、琴葉以外もう誰もいなかった。

ホワイトボードに書かれた予定表を見ると、一課のメンバーは琴葉と八重倉以外、全員外回り後に直帰となっている。

「課長は席を外されてるのかな」

八重倉の机の上は綺麗に片付けられていた。彼も、もう直に退社するのだろう。

今のうちに帰ろうと決めた琴葉は椅子から立ち上がり、ショルダーバッグを持ってロッカーに近付いた。扉を開け、ジャケットを取り出して羽織ると同時に、ドアが開く音がする。

そちらを見れば、八重倉がちょうど入って来るところだった。

琴葉に気が付いた彼は、ドアを閉めて立ち止まる。バッグの紐を肩に掛け直した琴葉は、彼に向かって軽く頭を下げた。

「八重倉課長、お疲れ様です。お先に失礼します……っ!?」

バン！ とロッカーの扉が閉まる音が響いた。驚く琴葉の上に影が落ちる。

右手でロッカーの扉を押さえた彼は今、琴葉の真正面に立っていた。背を屈めて、顔を近づけてくる八重倉を、琴葉は呆然と見上げる。

彼の薄い唇がつと動いた。

「今から付き合え、水無」

「え……??」

いつもより低い声に身体が震えた。眼鏡の奥の瞳が逆光で見えない。

顔はいつも通りの無表情だが、ここにいる八重倉は——いつもの八重倉ではなかった。

「急に消えた理由を話してもらおうか? ……ホテルのベッドから」

琴葉はひゅつと息を呑んだ。膝がかくんと曲がる。立っていられなくなつて、ロツカーにもたれかかった琴葉は、にやりと暗い笑みを浮かべた八重倉の前に、押し黙るしかなかった。

## 2 責任、取れよな

(覚えて、いたなんて……)

どうしよう。そればかりが、ぐるぐると頭の中を回っている。

呆然とする琴葉の左腕をむんずと掴み、八重倉はさつさと一課を後にした。

営業部の堅物敏腕課長が、部下を引きずるようにして退社するその様子に、エレベーターの中でも、一階ロビーフロアでも、あちらこちらから『何、あれ!』と言わんばかりの視線が琴葉に突き刺さってきた。

(目立ってる、けど)

誰も話し掛けてはこない。それは、無表情のまま大股で歩く八重倉に何かを感じたからだろう。

琴葉自身も彼の背中から漂う気配の重さに、言葉一つ発する事が出来なかった。

「あ、の」

それでも思い切つて声を掛けてみたものの、ちらりと振り返った八重倉の瞳の冷たさに、琴葉は凍りついた。

「話は後だ」

「はい……」

街灯が灯り始めた歩道を急かされるように歩く。会社帰りの人波を縫って、すすいと進んでいく八重倉は、宣言通りそれ以上口を開かなかった。

琴葉の心臓も歩調と同じように速くなっていく。大きな右手に掴まれた腕の感覚以外、何も感じなくなっていた。

駅の近くまで来た八重倉は、つと左に方向を変える。しばらく歩くと、植木に囲まれたロータリーが視界に入った。黒塗りのタクシーが並んで停められた向こうに、一階部分が一面ガラス張りになっている建物が見える。建物の中から漏れる金色の光が、玄関前の石畳を柔らかく照らしていた。

その建物に、琴葉は目を大きく見開く。

(こっつて)

昨日、琴葉が逃げ出した駅前のブランドホテルだ。

八重倉は何のためらいもなく自動ドアに向かい、中へ足を踏み入れた。緑の制服を着たポーターが、二人にお辞儀をする。

「え、あの」

真正面にあるフロントには目もくれず、八重倉はそのままエレベーターホールへと向かう。ちょうど停まっていたエレベーターに乗り込む時も、彼は無言だった。

静かにエレベーターの扉が開くと、彼はまたさつさと歩き出す。琴葉の腕は当然掴まれたままだ。一番端の部屋の前でようやく立ち止まった八重倉は、上着のポケットからカードキーを出し、さつとかざしてドアを開けた。

「あのっ、八重倉か……!?!」

引つ張られて中に入り、八重倉がこちらを振り返るのを見た途端、突然琴葉の視界がぶれる。眼鏡を奪われたのだと気付いた時には、彼女の身体はふわりと浮いていた。肩から鞆が滑り落ちたが、拾い上げる余裕もない。

「きゃあ!?!」

背中に柔らかいものが当たったと同時に、黒い影が琴葉の身体に押し掛かってくる。横たわる琴葉を逃がさないようにか、八重倉が四つん這いの体勢で彼女を閉じ込めていた。ぼんやりした視界の中、間近に迫った八重倉の顔だけがくつきりと浮かび上がって見える。

彼は自分の眼鏡も外すと、手を伸ばしてどこかに置いた。鋭く光る瞳が琴葉に迫る。

眼鏡がなくても彼の表情ははつきりと見えた。

こんなに感情を露わにする八重倉を今まで見た事がない。いつも冷静で、鉄仮面のようにと噂されている彼の瞳に浮かぶ、怒りとも熱ともつかない強い光に圧倒され、琴葉の身体は痺れたように動けなくなった。

しばらくの間、八重倉は何も言わず琴葉を睨み付けていた。互いの息がかかるほどの近距離に、

琴葉の唇が震える。やがて、彼は口を開いた。

「……昨夜はお前の方から、俺に抱いてくれと言ったよな？」

「っ！　そ、それはっ」

意地悪な言い方に、かつと頬が熱を持った。咄嗟に顔を逸らした琴葉の左耳に、八重倉の低い声が注ぎ込まれる。

「あれは俺をからかったのか？」

「……ち、ちが、っんっ」

唇で耳たぶを引っ張られる。そのまま頬や顎のラインに沿って動く彼の仕草は優しかったが、琴葉は怖くて堪らなかつた。

八重倉の声に潜む、何かが怖い。かなり怒っているのだろうか。自分に彼をからかったつもりはないけれど……

（氷川課長と間違えました、なんて言えない——）

真面目な八重倉の事だ。昨夜勝手に帰ってしまった事でさえこんな怒っているのなら、間違えたなんて知られた時は——

きつと、もつと怒るに違いない。

（知られたくない……っ……！）

この人だけに知られたくない。これ以上軽蔑されたくない。だけど、どうしたらいいのかわか

らない。

何も言えず身体を震わせている琴葉に、八重倉が無慈悲な言葉を告げた。

「だんまりを決め込む気か？　まあ、それでもいい。逃げた罰として、俺の好きにさせてもらう」

「えっ……あんんっ!？」

顎を掴まれて真正面を向かされた琴葉は、あつさりと唇を奪われた。驚く彼女が止める間もなく、唇を割って侵入してきた舌が歯茎をなぞり始める。ねっとりとした舌の感触に、ぞくりと悪寒が走った。

「んっ、むうん、んんっ」

両手で八重倉の胸元を押しても無駄だった。

彼の舌が逃げ惑う琴葉の舌に絡められる。粘膜と粘膜が擦れ合う感触に息が止まった。そのまま舌を吸われて、粘着質な音が唇の端から漏れる。

息が出来ない。苦しい。熱い。

「やっ、あ、んんっ……」

胸元に八重倉の手の熱を感じた琴葉は、びくりと身体を震わせた。すでにジャケットの前は開かれ、その下に着ていた白いブラウスのボタンも続けて外されていく。大きな手が琴葉の右胸をブラジャーごと覆った。

八重倉の唇も琴葉の唇から首筋へと移動していき、あちこちを舐めたり吸ったりしている。その

間、琴葉はただ身体を震わせる事しか出来なかった。

彼女が抵抗しなかったのか、彼の手がゆつくりと動き出した。

指先が胸の底辺に添えられ、そこから手のひらを閉じたり開いたりさせながら、中心に向かってゆつくりと柔肌を集め出す。

「やあっ……んんっ」

琴葉は髪を乱して首を左右に振ったが、八重倉の舌と指が止まる事はなかった。鎖骨のあたりにちくりとした痛みを感じた琴葉は、次の瞬間目をかっと思開く。

「……ひっ、あ！」

薄い布の上から硬くなってきた胸の先端を掴まれ、強い刺激が琴葉を襲った。

立ち上がった蕾を親指と人差し指で転がされているうちに、琴葉の息はどんどん荒くなり熱を帯びていく。

（八重倉、課長が、こんな事……！）

信じられない。真面目で堅物と評判の八重倉が、自分にこんな事をしているなんて。

あの飲み会の前までは、手に触れられた事もなかったのに。今、彼の唇も舌も手も指も、そのどれもが躊躇いなく琴葉のウィークポイントを暴いている。

ぶち、と金具が外れた音がして、胸を覆っていた白いレースの生地が上へとずらされた。ふるんと揺れる白い膨らみに、八重倉は顔を近付ける。左胸の先端が彼の口の中に吸い込まれた。

「ひゃあっ!？」

軽く乳首を噛まれた琴葉は、思わず悲鳴を上げた。

ぴりりと鋭い感覚がお腹の方へと流れていく。八重倉は薄い桃色の乳輪を舌でなぞりながら、身体を揺らす琴葉の顔をじつと見つめていた。

「あ、あんっ、やめっ、てっ、はああんっ」

八重倉の髪を思わず掴むが、彼の動きは止まらない。ふくりと立ち上がった右胸の蕾も、未だに彼の指に扱かれている。

下腹部に今まで感じた事のない熱が溜まっていき、じわりと何かが身体の奥から流れ出てきた。こんな感覚は知らない、分からない……怖い。

「あっ、あああんっ」

琴葉は太腿を擦り合わせ、身を振った。交代に吸われて濡れた蕾は、ますます敏感になっている。硬い蕾に舌を巻き付けられ、甘噛みされ、吸われ——そして指で揉まれるの繰り返しに、琴葉は甘い呻き声を上げ続けた。

「はっ、あっ……あうっ、あああああっ」

頭の中でばちんと光が弾けた。

身体を仰け反らせた琴葉に八重倉は顔を上げ、荒い息を吐く彼女を見下ろす。熱の籠った身体をもてあまし悶えていた琴葉は、ぼうっとしたまま八重倉の顔を見た。

彼の瞳は、どこか冷ややかな色をしていた。その表情は硬く、琴葉のように息を乱してもいない。氷のような冷たさが、琴葉の心を震わせる。

(……………！)

蕩けそうな身体の奥に鈍い痛みが突き刺さった。残酷な事実が琴葉に押し掛かる。

彼はこの状況に流されてなどいない。ただ、怒っているだけだ。今こうしているのも欲望からではなく、おそろく琴葉への罰——

「や、あ……………」

(軽蔑、されてるんだ…………)

琴葉の視界が滲んだ。涙が、火照った頬を伝って零れ落ちる。身体は熱く潤んでいるのに、心はすっかり硬く冷え切ってしまった。

八重倉の舌が胸からへその辺りまで落ちてきても、琴葉は抵抗せず、ただ小さくしゃくり上げるだけ。

スカートのホックに八重倉の手が掛かっても、口からは掠れた泣き声しか出ない。

(ごめん……………なさい…………)

ごめんなさい。私の事情に巻き込んで、ごめんなさい。

軽蔑されなくなかった。こんな目で、見られたくなかった——

ただ、そればかりを思う。

力の抜けた琴葉の両手がベッドに落ちた。これ以上八重倉を見ていられなくて、琴葉はぎゅっと目を瞑る。ベッドに身体を投げ出した琴葉は、彼が何をしようと受け入れよう、と静かに覚悟を決めた。

「っ、くそっ！」

苛立った声に琴葉がびくんと全身を震わせると、八重倉はおもむろに身体を起こし、彼女に薄い毛布を掛けた。琴葉は反射的に八重倉に背を向け、自分を守るように毛布の下で背を丸める。

八重倉がベッドから下りた気配がしたが、琴葉は動けなかった。ベッドの上でただ静かに涙を流し続ける。

胸が苦しくて、痛くて……………悲しくて、申し訳なくて。

ぐちゃぐちゃな想いを抱えた琴葉は、それ以外にどうする事も出来なかった。

数分後、再びベッドマットが少し沈む。それに気付いた琴葉が身体を強張らせると、後ろから静かな声があった。

「……………済まなかった」

さっきまでの声とは雰囲気が違う。

琴葉は涙を拭き、恐る恐る声の方へと顔を向ける。そこには八重倉が、ベッドに腰かけたまま、膝に肘を乗せて俯いていた。

「嫌がる女性に無理強いするなど、男のする事じゃない。かっとなつて怖がらせて済まなかった」



「や、えくらか……ちよう」

琴葉は毛布の下から顔を出し、何とか声を絞り出した。顔を上げた八重倉が、ベッドヘッドから琴葉の眼鏡を手にとって渡してくれる。それを掛け、改めてこちらを見下ろす彼を見ると、その表情は今まで見た事もない程暗かった。

「お前は昨夜、抱いて欲しいと俺に縋<sup>すが</sup>ってきたにもかかわらず、さっさと逃げ出してしまった。その後も知らぬふりをして、今だって何も弁解しなかった。抱いてくれと言ったのは、俺をからかっただけなのかと思っただけ瞬間、理性が吹き飛んでしまった。……言い訳に過ぎないが」

「ちが……います。私、からかって、なんか」

そう、からかうつもりなんてなかった。八重倉は真面目だから、琴葉の事情に巻き込めば、きつと傷付けてしまう。だから氷川を選んだのに——琴葉が間違えたせいで、この人を怒らせてしまった。

その言葉を聞いた八重倉の瞳が鋭く光った。

「なら今、何故あれだけ嫌がった？ 俺をからかってみたものの、怖くなって逃げたんじゃないのか？」

「違います！」

琴葉は毛布を胸に当てたまま、身体を起こした。まだ少し怖い。だけど——

「……だって！ だって、八重倉課長、怒ってたじゃないですか！ だっ、だから怖かった……！」

行為は激しいのに瞳が冷たかった。尊敬するこの人に冷たくされた事が、堪<sup>たま</sup>らなく怖かった。

「わ、私が、あんな事をしたからっ……だから、きつと課長は私を、軽蔑<sup>けいべつ</sup>したって、そう思っ  
て……！」

再び涙がぼろぼろと零<sup>こぼ</sup>れ落ちた。八重倉の表情がぼやけて見える。

「だ、けど、今朝、会社で顔を、合わせた時、課長はいつも、と同じ態度……だった、から」

つかえつつかえ話す琴葉の言葉を聞く八重倉は、無表情のままだった。

「……きつと、昨日の事覚えてないんだろう……って。それなら、そちらの方がいいって思ってた、  
のに」

「……」

「でも、覚えてて……それで、お、怒ってた、から……こんな、事、した、んで、しょう……？」  
無言のままの八重倉の前にそれ以上何も言えず、琴葉は俯<sup>うつむ</sup>いてしまった。不自然な沈黙が、二人の間に横たわる。

（何、課長に文句を言ってるの、私……悪いのは私の方、なのに……）

そう、そもそも自分が酔っぱらっていなければ、こんな事にはならなかった。相手を間違える事もなく、逃げて八重倉を不愉快にさせる事もなく、仕事上のいい思い出だけを彼に残して、会社を去れたはずだったのに。

（それも、もう出来ない……）